



有限会社 平賢

約 25mの捺染台（シルクスクリーン）が、工場内に悠然と並ぶ境野町の平賢。その捺染台では、職人の手でリズムカルに上下するへらが巨大な鯉のぼりや半纏を染め上げていく。

創業は 1957 年（昭和 32）、創業者である平田賢造さんが着物や風呂敷の友禅染めを始めた。本格的に鯉のぼりの生産を開始するのは、第二次ベビーブームと重なる昭和40年代後半で、手描きのものから大量生産が可能なナイロンの素材の型染めへと変わっていった。現在、保有する約 6,000 枚の鯉のぼりの型は、平賢が積み上げてきた歴史そのものである。

しかし、少子高齢化社会の到来やライフスタイルの変化に伴い、鯉のぼりの需要も徐々に減少している。時代に合わせて、室内飾りや吊し飾りなどの部屋の中でも飾れるものを作る一方で、これまで培った染色技術を活かし新しいものづくりにも着手している。専務取締役の小山哲平さんが企画した「桐生てぬぐい」は、てぬぐいの使い勝手の良さやデザインのしやすさに目をつけ 2016年に立ち上げたブランド。生地から一枚一枚手染めにこだわり、豊富なデザインと捺染業者ならではの色鮮やかなカラーバリエーションで、早くもてぬぐいファンから注目を集めている。デザインは小山さん自らが、織物やのこぎり屋根工場など“桐生らしさ”をあしらい、「織物のまち＝桐生」のPRにも一役買っている。

また、製造工程にも熟練の技が注がれる。てぬぐいは重ねた生地の上から染料を注ぎ、裏表同時に染め上げる「注染」が一般的。ところが桐生てぬぐいは、絶妙な粘度の染料を使用することで、型染めで裏面を均一に染色する。試行錯誤により生まれたその技術は、注染では表現不可能な裏表異なる模様を染め上げるリバーシブルてぬぐいの誕生へと発展していく。その他、秋冬用には通常のとぬぐいサイズよりも長尺で、マフラーのように使える「てぬぐい+（プラス）」を開発するなど、「他にはない物」を追う小山さんの情熱は尽きることがない。

創業から半世紀、平賢の捺染台では熟練の技術と若い感性が融合し、新たなものづくりへ挑戦し続けている。



大空を駆ける染色技術
新たな感性たずさえ新ブランドを創造